

日精上人書簡類蒐集に就いて

三 木 淨 達

島智良師、唯誠院日精上人については、世既に定評のある所で今こゝに詳記するの要はあるまい、身延山史には「師は實に近古を通じ祖山の生める高僧の一たり」とある。

この一事に見るも、凡そ上人が凡物でなかつた事は明確である。

宣なるかな、上人を追慕する人々によつて島智良師追慕會が組織され、島智良師遺稿及び小傳が世に出た事は讀者の既に熟知の事である。

今や宗門の官僧が都門に參集して、樽俎折衝合縱連衝に腐心するの状は、少くとも道に志すものゝ永歎に値するものである。こゝに於てか我々は隱聖元政和尚や本妙律師を敬慕し私淑して遂に高僧の列に入られた日精上人を追慕するの念益々俊烈なるを覺ゆるものである。世には紫衣金襴に身を纏ひ、高位に住する僧はある、が然し名僧高僧として其の名を永く青史に留むる者、果して幾人かあらう。

實や、日精上人は祖山の生める高僧であり祖山學徒の追慕、禁ずる能はざるの先師先徳でなくてはならぬ。

然しながら我等は不幸にして、上人に面奉する事を得ず、唯これを既刊の書に見、生前上人と交遊ありし諸氏、或は上人の教子たりし諸先輩に聞くのみである。

凡そ、追慕思念する者の常として、その人の片鱗にだに觸れようご勉め、且、より深く知らうとするは自然の勢である。

師逝きて既に十六年。我々は四方に尋ねて、上人の書簡を蒐集し、以て上人の法身、長に世を利し祖山學徒の二陣三陣の奮起を期せんとするものである。

冀くは棲神讀者にして、上人の書簡を有せらるゝあらば、進んで寄投せられて、我等が擧を成就せしめられん事を。

今こゝに上人外護者の一人たりし大阪早野氏に致せる當時の消息一篇をそのまま記載して上人の人格の一斑を偲ぼう。

身延より大阪早野氏へ與ふる書

拜呈、其後無事御歸國なされ候由、御通知有之喜奉候、申しも事新しきに似て候得共、誠に此度は不思議な命拾を致され再び御參詣なされ事夢の様に御座候、信心で病氣の治るは昔の事の様に思ひ今

の世にかゝる話は迷信か頑固の様に取ればはれ僧も俗も醫者よ薬よ尋ね廻る中に見事信心の徳にて病は治り醫者を驚かし候など、末代難有利益を頂きし事に候、上行菩薩の利生愈末世に顯はれ候御義と、深く肝銘仕候

さて御登山中は小生不加減の爲め何の風情も仕らず却々種々御看護に預り候事何とも恐入り候、一時回復と存じ十四より稽古引續き居候處旧九日より又々工合悪しくなり學校も致しかね居候、手足だるく肩張り胸肋痛み机に寄り筆取る事難く一時は何ふなる事か心配致し候、昨日醫者に見て貰ひしに神経痛と分り暫く安心候、兎に角當分遊ぶ考に候、依て近日中、學校の運動會をかね富士五山を廻り内房にて都合により休養致しべく候、小生の考には學校をやり居りては、一向自分の行學ならず候故是れ尋に學校をやめ、何れかへ隠れ一心に學行をはげみ致し存居候、誠に人に教へるなどは我等の事にあらず、先づ我身の罪障消滅を祈り自身の得脱を願ふこそ本意なるに、一時の身の安穩に醉はされ、世間に交り候事返すくも誤にて有之候、たゞ此山離れては日朝上人の心血を注がれし著述の保存もならず、又改板の志願もならず依て今に決すかね居候、さりとて今の様では是も居ると云ふ斗りにて事業の進捗もなく、一生學校教師にて朽つる位に候か、此の考晝夜に心を苦め終に此病引起せしか、誠に大決心、大勇猛心ならでは佛道成り難しとは、初めて心付き候、身の出世や食ふ爲や學者になる

などは皆迷にて候、實のなき山吹の花の如きは蓮華經の精神ならず候、何れ内房にても相談致し決心仕るべく候

尼の方も御尋ね置き被下度枝山の横川へも参り度存居候

此夏休に本妙様の本の第二編出版の積りにて候故、東京か西京へ出張致しべく候

御依頼申置候買物、御ひま相見て相整被下度、バナマの帽子も一個願上候

乾板に「整色乾板」と云ふのがありて、赤みのある者も感光致し由、コハ御本尊などの古く赤ミたるものよかるべしと存候故一ダース御願候、試みるべく候

御歸國後御疲勞も出でず候や、随分御大事なされ度候、光藏さん方も御羽かきに預り忝く候

六月一日

草々

早野様

智良生

今日お一日にて初て御經に出候、随て疲れ候、相畧し候まゝ